

立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）
 大学院生研究
 2014年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院 文学 研究科 日本文学 専攻		
研究代表者 (2015年3月現在のものを記入)	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
	文学研究科・日本文学専攻・博士課程後期課程3年	米山 大樹	印
指導教員	所属・職名	氏名	
	文学部・教授	藤井 淑禎	印
自然・人文・社会の別	自然 ・ <input type="checkbox"/> 人文 <input checked="" type="checkbox"/> ・ 社会	個人・共同の別	<input type="checkbox"/> 個人 <input checked="" type="checkbox"/> ・ 共同 名
研究課題	昭和三〇年代前後における老人文学の研究—晩年の室生犀星を中心に—		
研究組織 (2015年3月現在のものを記入)	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
	文学研究科・日本文学専攻・博士課程後期課程3年	米山 大樹	
研究期間	2014 年度		
研究経費	(支出金額) 200,000円 / (採択金額) 200,000円		

研究の概要 (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究は、昭和三〇年代前後の日本における〈老人が老人を書いた〉文学を対象として、個々の作品の読解及び、〈老い〉への関心が社会福祉の問題として表面化していく過渡期であった時代状況と言説との関係性の検討によって、そこで〈老い〉がどのように表象されていたのかを検証するものである。特に、『随筆女ひと』（新潮社、昭和30・10）、『杏つ子』（新潮社、昭和32・10）の評判を受けて文壇的復活を果たしたとされている室生犀星の文学営為に着目し、「蝶紋白」（「文芸」昭和29・6）や「朝顔」（「声」昭和34・10）などをとり上げ、身辺雑記的と捉える事の出来る作品群における身体不調や老醜の自覚についての表現を中心に考察した。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[昭和三〇年代] [老人文学] [室生犀星]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

本多秋五「文芸時評」(「東京新聞」昭37・1・30)は、室生犀星「われはうたへどやぶれかぶれ」(「新潮」昭37・2)について、「かくいう私なども早晚そこに到達しなければならぬ人生の秘境—老齢と難病を克明精細に描いたもの」「あくまで特異な感覚を通じて、そこに普遍性のある人生の秘境が事こまかに報告されている」と書いているが、この昭和三〇年代前後、多くの〈老い〉を描いた小説が話題となり一種の流行状態にあった。平野謙「文芸時評」(「毎日新聞」昭37・5・1・夕刊)は「癡癡老人日記」をとり上げる際、「秘境ものという評語のなかには、自分はまだ辺境にいないという安心感と、しかし、すべての虚飾をとりはらえば、彼我の差いづくにかある、という予感なり不安感なりがそこにこめられていたかと思う」と本多の評に反応し、「無論、本多の評語はいわゆる老人芸術のことをさしている。老人芸術などとは曖昧な言葉だが、それは単に老人を書いた作品でもなければ、老人が書いた作品でもない。老人が老人を書いた作品のことである」と「老人芸術」の定義を行っているが、このような「老人が老人を書いた作品」という言葉は昭和三〇年代の老人表象を概括する場合に限って特別な説得力を持つ。

従来の研究において、三好行雄「性愛の果て——近代文学におけるもうひとつの〈愛〉」(「日本の美学」昭和62・11)が既に、室生犀星『蜜のあはれ』(新潮社、昭和34・10)、川端康成『眠れる美女』(新潮社、昭和36・11)、谷崎潤一郎『癡癡老人日記』(中央公論社、昭和37・5)を挙げて、「個々の作家の資質の成熟とともに出現してきたという固有性と同時に——それぞれの作家にとって、生涯をかけた主題の完結を示す作品であると同時に——死を予感しつつ、自己の経てきた過去に重ねて、人間の生のありかたや愛の意味をあらためて問おうとする普遍性をも担っている」として、これらの老大家たちが〈老い〉を描いた傑作が「日本の近代文学のひとつの節目を暗示する作品でもあった」ということが既に指摘されている。

本研究は、そのような昭和三〇年代前後の日本における〈老人が老人を書いた〉文学を対象として、個々の作品の言説を詳細に読解し、また、〈老い〉への関心が社会福祉の問題として表面化する過渡期であった時代状況と言説との関係性の検討を通して、その中で〈老い〉がどのように表象されていたのかを検証するものがある。

特に、『随筆女ひと』(新潮社、昭和30・10)、『杏つ子』(新潮社、昭和32・10)の評判を受けて文壇的復活を果たしたとされている室生犀星の晩年の文学営為を考察する上で、〈老い〉をめぐる問題の検討は重要である。本研究では、「蝶紋白」(「文芸」昭和29・6)や「朝顔」(「声」昭和34・10)などをとり上げ、身辺雑記的と捉える事の出来る作品群における身体不調や老醜の自覚についての表現を中心に考察した。

(1) 室生犀星「蝶紋白」について

『黒髪の手』(新潮社、昭和30・2)は、室生犀星にとって、短篇集『氷つた女』(クラルテ社、昭和23・10)、随筆集『泥孔雀』(沙羅書房、昭和24・8)以来の新刊作品集であった。新潮社編集者であった谷田昌平宛書簡(『室生犀星全集』別巻2、新潮社、昭和43・1)には、「作中の故人もまた作中の人もひとたびは、黒髪の人であったといふ意味」という題名の解説や、収録作品や装幀についての細かい指示が書かれているなど、犀星にとって待望の一冊であった。しかし、後に「私の履歴書」(「日本経済新聞」昭和36・12・6)の中でこの時期について回想した「昭和二十九年小説「ボストンバッグ」を書き前の年の「生涯の垣根」とともにいささか見直され立ち直つたが、随筆『女ひと』『続女ひと』を書いて久しぶりで、書物としてこれを机上に眺めることが出来た」という犀星の文章に代表されるように、『随筆女ひと』以降の復活の影で、その〈前夜〉に出されたはずの『黒髪の手』は十分な評価を受けていなかった。

本研究では、「文芸」昭和二十九年六月号に発表された後『黒髪の手』に収録された、短篇小説「蝶紋白」を対象とし、『黒髪の手』の犀星の文学営為の上における定位及び、作中に描かれた日常の言葉との邂逅について文体・形式との関連からの検討を目的とする。

同研究には、先行研究として、澤田繁春「入院もの三部作「黄と灰色の問答」「文章病院」「蝶紋白」について——晩年開花への跳躍台——」、「室生犀星研究」平成6・10)がある。先行研究では、随筆集『誰が屋根の下』(村山書店、昭和三一・一〇)収録の「文章病院」(初出「群像」、昭和29・4)、「黄と灰色の問答」(初出「小説公園」昭和29・5)とともに「入院もの三部作」として、昭和二十九年一月に胃痛を患い、一月二二日から二月二三日まで日比谷胃腸病院に入院した犀星自身の入院生活との重なりあう側面が重要視されてきた。しかし、『黒髪の手』の「序文」には「蝶紋白」は「黄と灰色の世界_(マヤ)」「文章病院」の三篇からなり立つ、病憊の中の一つの世界であるが、この二篇を割愛して「蝶紋白」だけをここにをさめて見た」と記されており、随筆集に収録されることになる二篇から切り離してまで、「蝶紋白」だけが待望の作品集『黒髪の手』にまず収録されたということには注意を払う必要があるだろう。

研究成果の概要 つづき

同時期の犀星の「日記」(『室生犀星全集』別巻 2、同前)には「入院してみても、やはり書いてあるデブシイ生活」、「医者之眼をぬすんでした仕事」と記されており、入院生活の最中に執筆したものとして「黄と灰色の間答」と「文章病院」を含む数篇が列挙されている。「黄と灰色の間答」「文章病院」の内容でも、「病室は彼がはひると同時に仕事場になり、彼はベッドの上で原稿の取引執筆をやつてみた」(「文章病院」というような医者に隠れて病室で執筆する描写がある。これに対して、退院後に書かれた「蝶紋白」では、「文章」を休ませ、生き返らせることが強調される点に特色がある。その羽化・復活の方法を、作中の「彼」が病院で「かんごふ」との交流から垣間見た、ある種の日常の「言葉」、「詩」や「小説」の中では見付からない非・固定的な言葉との邂逅であると捉えた上で、随想風のエピソードの集積やそこでの「横這ひをつづける」「老いたる蟹」と表現される〈老い〉の姿について、そのような言葉を〈小説〉に織り込む試みとして考察した。

上記の成果については、「室生犀星「蝶紋白」論——「言葉」と邂逅するための「横這ひ」——」として、室生犀星学会 2014 年度秋季大会(平成 26・11・15、於タワーホール船堀)にて学会発表を行った。

(2) 室生犀星「朝顔」について

本研究で取り上げる「朝顔」(群像、昭和 34・10)は、モデル問題などから室生犀星の評伝的な受容の中で重要性及び話題性を持つ短篇小説であるものの、従来、研究の俎上には殆ど上ってこなかった。

しかし、同時代の評価において「それは随筆だろうか、詩だろうか、小説だろうか。——そうした疑問を無にしよう、深い輝きがここにはある」(中村真一郎「文芸時評 一月号」、『週刊読書人』昭和 34・10・26)と、この作品が小説というジャンルに収まるかという問題が提起されていた「朝顔」は、小説や随筆を始め、詩や俳句など多数のジャンルに跨り、その境界を漂うことで常に文体を更新してきた犀星について、その表現からジャンルの問題を検討していく上で、看過できない意義を持つ。

近年の先行研究では、岩田恵子「朝顔」(『室生犀星研究』平成 14・11)が数少ない一例であり、「美しいと思った女と繋がりのある時計の中に、女の皮膚の感覚を探り、自らの生命を見出したのではないだろうか」と時計から女性への連想について、犀星の他の詩などを引用しつつ論じている。本発表では、むしろその連想の結び目が作中でどのようなものとして表れているかについてを重要視し、「朝顔」の語りのモノログ性と、それが作家による言葉である点から、連想を統禦し小説として対象を捉えようとする「私」と、そこから抜け出すことで「私」に新たな関係、新たな言葉を提示する少女・伴つみ子の関係を検討した。

「この少女にも、小説の宿命が宿つてゐる」という一文から始まる「朝顔」では、「私」が少女に「小説の宿命」を見出すというような、連想によって紡がれる「小説」なるものの曖昧な輪郭が冒頭から提示されている。「小説」を頼りにし、「みなこの問題に生きものを片寄せて見てゐる」と自嘲する「私」について、女性を「小説美」として「小説」なるものに置き換えて読んでいき、捉えようと欲する動きが指摘できる。また、「朝顔」において、そのような「小説」を読む「私」の認識が向けられる主な対象はデパートの時計売場で働く伴つみ子という一人の少女である。伴つみ子を眺める「私」の頭の中での、他愛もない「作文」行為は、モノログ的な語りとして膨らみ、「小説」を立ち上げていく。一方で、伴つみ子の特異な点は、「私」を見返す点にあり、その時に「私」は〈老い〉を自覚させられる。見るものとしての「私」の権威性をすると抜けだして「私」を見返す伴つみ子は、「私」のモノログに統御されるだけの存在に留まらず、彼女の「かがやいた瞳」、「はれやかな顔つき」について、「私」はそれ以上に読み取る言葉をもたない。「小説」としての少女の発見に始まった「朝顔」の、その「小説」から逸脱していくものとして伴つみ子を再発見する収束部を検討した上で、その「私」と伴つみ子の関係性の先に開かれた、権威性の安定とは異なった〈老い〉を再編成する可能性について指摘した。

上記の成果については、「室生犀星「朝顔」論——「小説」からの逸脱と〈老い〉の再編成へ——」(『室生犀星研究』平成 26・11)に発表している。

昭和三〇年代前後の老人文学を概観するための調査や、小山清「老人と鳩」「老人と孤独な娘」などについて此処の作家・作品を捉えなおす考察を進めており、今後、成果の発表を予定している。

また、本研究との関連は薄いですが、室生犀星が大正一〇年に発表した小説について、学会発表「幻影の都市」を室生犀星学会第 134 回定例研究会(平成 27・3・28、於タワーホール船堀)にて行った。歩行者の幻想と都市に潜む生活者・落伍者、また若い女性へ隔たりを感じつつ投げかける視線というモチーフは晩年の作品群と通底しており、ポーズとしての〈老い〉について検討していく上で重要な機会であった。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

① 【雑誌論文】

▽ 著者名 : 米山大樹、

論文表題 : 室生犀星「朝顔」論—「小説」からの逸脱と〈老い〉の再編成へ—、

雑誌名 : 室生犀星研究

巻号 : 第 34 輯、発行年 : 2014、ページ : 29-40

④ 【その他】

(学会発表)

▽ 発表者名 : 米山大樹、

発表題目 : 室生犀星「蝶紋白」論—「言葉」と邂逅するための「横這ひ」—、

会名 : 室生犀星学会 2014 年度秋季大会、開催日 : 2014 年 11 月 15 日、

開催場所 : タワーホール船堀

▽ 発表者名 : 米山大樹、

発表題目 : 「幻影の都市」、会名 : 室生犀星学会第 134 回定例研究会、

開催日 : 2015 年 3 月 28 日、開催場所 : タワーホール船堀